

佐賀市 22 歴史探訪

ついでに はんしゃろ しゅすいぜきあと 築地反射炉の取水堰跡？

築地反射炉は、嘉永3（1850）年に完成したわが国最初の西洋式溶解炉で、日新小学校敷地を中心とした範囲に所在したものとされています。

反射炉建設の契機は、フェートン号事件などの反省とアヘン戦争の情報などから海防意識が高揚し、時の藩主鍋島直正を中心に、蘭学研究に力を注がれたことによるものです。その結果、全国に先がけて反射炉を建設しました。反射炉というのは鉄を大量に、効率よく溶解する施設のことで、この反射炉で大砲を造り、長崎の防衛を図りました。

大砲を造るには、高度な溶解技術だけでなく、砲身^{あな}に孔をうがう技術も必要です。佐賀藩では、この技術の「動力」に水力を用いました。天祐寺川^{せき}に堰を設け、そこから小水路に水を引き、水車を回しました。この水車の回転運動を利用したのです。

現在、「築地の反射炉」本体や水路、水車小屋などの施設の位置関係は分からなくなっていて、日新小学校敷地や民家となっていますが、天祐寺川の形状だけは、往時のものとそれほど変わっていないようです。

ある研究者が、この天祐寺川の水中に切石群を見つけ、反射炉時代の「取水堰」ではないかと提言されました。その位置は日新小学校敷地の北東部で、川沿いに水門を有する小水路が現存していて、水中の切石群はその東に位置しています。位置関係から判断すると、反射炉時代の堰である可能性もあるかもしれませんが、水中のことであり、調査するのも困難なため、断定しづらい状況です。当否は専門家による今後の研究によっても、河川改修などの工事が計画される場合には配慮すべきものと思います。

一口メモ 取水堰以西の水路推定地の調査

平成21年8月に、日新小学校敷地の水路推定地の埋蔵文化財確認調査が行われました。その結果、浅い溝が一条検出されましたが、区画のための溝であり、流水を伴うものではありませんでした。



▲日新小学校敷地に隣接する「築地反射炉」の模型



▲日新小学校敷地から、東方の天祐寺川につながる小水路



▲取水堰跡